

## 巻頭言

せまりくる気候危機、海洋プラスチック汚染、森林破壊、種の絶滅に、放射能汚染。21世紀に入り、環境問題はますます深刻化しています。加えて、日本の国内、地域社会は、経済大国から後退し、少子高齢化、インフラの老朽化、生態系劣化や里山後退、エネルギー価格高騰など多様な問題に直面しています。このような多様な問題群を、多目的かつ同時に解決し、持続可能な脱炭素型・循環型社会へと移行していくこと（トランジション）が、今求められています。

トランジションを確実に進めていくためには、何が必要なのでしょうか？ 科学技術、資金？ それとも法律、あるいは人々の意識でしょうか？ これら全てを方向づけるのが、政治です。徹底した情報公開、報道の自由度の高さ、地方分権、開かれた政策形成プロセスと、様々な次元での市民参加・ジェンダー平等などは、総じて、多様性を重んじる人に優しい環境取組、脱炭素社会への持続可能な移行を可能とするといえます。翻って地域では、世界や地域の問題に心をよせつつも具体的な行動に踏み出せない、あるいは選択肢を知らない、知る機会がない学生や市民の方々も多いのも事実です。

そこで、環境政治学を専門とする宇都宮大学国際学部の高橋ゼミでは、UU3S プロジェクト（Utsunomiya University Students, SDGs, Solution（宇大生 SDGs 解決）Project の略称）を立ち上げました。研究者、学生、NPO や市民、行政などの、多様なステークホルダーのパートナーシップを創出し、実践や相互学習を行い、問題構造の把握や具体的な行動について、見える化・情報発信をし、脱炭素社会への持続可能な移行への道筋を模索することにしました。

本プロジェクトの出発点は、SDGs 映画上映会・ワークショップでした。2020 年度、Covid-19 による移動規制で他流試合が出来なくなった学生たちとともに、気候変動、再エネ、種子と食、ファストファッション、原子力災害、ローカリゼーションと、学生たちが選んだ多様なテーマを取り扱った 6 度の映画上映会+WS をオンラインで開催しました。メディアにも取り上げられ好評を博したこの取組は、その後も継続し、2021 年度は、プラスチック、トランジション、グリーン・ライ、フェアトレード、2022 年度は気候危機とプラスチック、2023 年度はプラスチックをテーマに、それぞれ上映会と WS を重ねてきました。これらの映画上映会には、学生や市民の方々など、述べ 800 名以上の方々が参加しました。

Covid-19 による規制が徐々に解消に向かうにつれ、本プロジェクトでは、映画会で生まれたパートナーシップをもとに、関連の実践活動にも着手していきました。具体的には、①持続可能なエネルギー（再エネ教育、コラボレーション型研究教育など）、②NbS（Nature-based Solutions: 自然由来の解決法：里山保全・市民農園など）、③リフィルうつつのみや、の 3 分野です。それぞれ、実践・調査・情報普及・対話を重ねていきました。その内容は、『UU3S プロジェクト報告書～活動報告編』（2023）にまとめています。

本報告書『UU3S プロジェクト～卒業研究編』は、同報告書の対として作成されるものです。本研究室では、2009 年度より、ゼミ生たちが書き上げた卒業研究や修士論文を、ゼミ論文集の形にまとめてきました。本報告書は、その 2023 年度版とも位置付けられます。今年、卒業研究を書き上げた 7 名に共通するのは、全員が UU3S プロジェクトの多様な経験から、各々問題関心を掻き立て、深掘りし自ら調べ、思考を重ね、大学時代の集大成となる卒業研究へと結実させていったことです。表紙裏の図「UU3S プロジェクトの軌跡」は、その発展の経緯をごく簡単に可視化させたものです。

それでは、例年の如く、ゼミ生たちが辿った卒業研究の道のりを、ここで確認しておくとしましょう。国際学部では、ゼミは実質的には 3 年次からはじまります。しかし、今年の卒業生は、早い人では 1 年次、あるいは 2 年次から、上述のオンライン SDGs 映画上映会に参加しました。中には積極的に、企画や発表にも関わり、議論をリードしてくれた学生もいました。そして、3 年次前期の「環境と国際協力演習」では、環境政治

に関する専門書の輪読も始めました。環境問題が引き起こされ深刻化し、社会の分断を招いていく構造は、多くの公害事件等において共通しています。一方で、人類は、多くの悲劇的事件から学び、社会的学習をし、持続可能な発展を可能とさせるような数々のアイデア、政策手法をも編み出してきました。負の遺産と、持続可能な営みの双方を学問的に学び、持続可能な発展を希求するための基本的な知識や論理的思考方法を身に着けることを目指しました。3年次後期の「卒業研究準備演習」では、社会科学、とりわけ政治学的な研究のデザイン方法についての専門書を読みました。並行して、事例研究論文（多くは、先輩たちの過去の卒業研究論文）も読み、自ら研究デザインについてのイメージをふくらませました。

輪読と並んで、本研究室では他流試合やフィールドを行うことを常としてきました。Covid-19 パンデミック前は、他大学（茨城、筑波、群馬、創価大学）の合同ゼミがその支柱でした。熱い Debate を戦わせ、経験を積んでいました。Covid-19 パンデミックでそれが出来なくなってから、かわりに上述の UU3S プロジェクトのオンライン SDGs 映画上映会や、その他のワークショップなどで、対外的な発信や対話も続けました。加えて、本研究室では、座学に止まらない実践的な学びとしてフィールド調査も大切にしてきました。この点、今年度に卒業研究を書き上げてくれた学生たちは、それぞれ 1-2 年次には、Covid-19 パンデミックによって実践活動ができませんでしたが、3年生になってからは、むしろその経験をバネとして、先述の UU3S プロジェクトの実践・調査・普及対話活動に、実に積極的に関わってくれました。再生可能エネルギー教育や里山保全、市民農園の諸活動、さらには映画会から派生したリフィルうつのみや（使い捨てプラ削減を目的とした、給水スポット・マイ容器取扱店の普及拡大活動）、それぞれについて、自らの関心が高い分野を中心に、大車輪の活動をしてくれました（活動報告編参照）。また、2023 年 3 月には、ゼミ旅行として、足尾鉍毒事件の現場である足尾地域や渡良瀬流域を練り歩きました。

以上の経験を積んだ上で、2020 年度末には、各自の関心に沿って研究課題を設定し、先行研究を読み進めることを推奨しました。そしていよいよ、4 年次は、卒業研究執筆です。前期に、問題関心からリサーチクエスチョン、先行研究レビューにもとづく総論をまとめ、分析概念や事例分析のための枠組を構築したうえで、夏にかけてフィールド調査を行い、秋口には事例調査をまとめて、考察、検証をすすめて、結論を導きだしていく、というスケジュールです。

論文を書く上で、本研究室で大事にしているのは、第一に、リサーチクエスチョンを明確にし、なぜかを追求し続けることです。クリティカル・シンキング（「本質的思考」の観点から、何が本質的な問題なのか、思考の深掘りをする姿勢を大切にしています。思考を膨らませ整理するのに重要であるのが、土台（分析概念や枠組）作りです。ゼミでは、教員が用いる政治学上の特定の分析枠組や概念を使うよう指導することはありません。政治学的な関心は背景にあります。分析概念や枠組は、個々の問題設定に応じ多用であるべきです。国際学部らしく、人文社会にまたがる多種多様な先行研究から、リサーチクエスチョンを解き明かすための分析概念を探りだし、確かな実証の元に、本質をあぶり出す。これら全てを自ら行うには、発想力、感受性、論理的構成力、読解力、そして高度な実証力も必要とされます。

卒業研究で大切にしている第二の点は、先述のフィールド調査です。百聞は一見に如かずといいますが、現場に足を運び、当事者の声に耳を傾け、五感を駆使して感じ考えることで、現実から遊離せず、本質に迫ってほしいと願っています。この点、UU3S プロジェクトを足がかりに、全員が、なんらかのフィールドや学外との対話に関わりました。例えば、「プラスチックの海」（2021/3 年度）や「マイクロプラスチックストーリー」（2022 年度）の映画上映会をもとに、藤田晋之佑は「なぜ日本の使い捨てプラスチック政策は遅れているのか」を問いました。同映画上映会から、リフィルうつのみやの活動をリードした山崎彩貴さんは、自らの参与型観察をもとに「日本のプラスチック発生抑制への取組みの課題と可能性を追求しました。「Tomorrow～パーマネントライフ」（2021 年度）とその後の宇都宮市や山形県での調査視察に同行した田所莉紗さんは、その後の自身のアメリカ留学経験も踏まえつつ、「なぜ日本で地中熱利用が広がらないのか」をさらに深堀りしまし

た(2023年度 国際学部 優秀論文に選出)。映画会を経験した杉浦理子さんも、「グリーンライ」(2021年度)から、「日本のオーガニックコスメは信頼に足りうるのか」という問題関心を広げていきました。なお、気候危機や再エネについては、上述の「Tomorrow」に加え、「気候戦士」「Power to the people」(2020年度)、「グレタ〜ひとりぼっちの挑戦」(2022年度)などの上映会も行いました。ここから、数多くの関連ワークショップや対話がプロジェクトでは繰り広げられました。そこに積極的に関与しつつ、鳥取県での視察調査に同行した高橋この葉さんは「自治体新電力の発展拡大における障壁と課題」、藤田雅さんは「欧州・日本・鳥取県の断熱基準の差異をめぐる認識論的考察」を深堀していきました。一方、自然体験を幼少期から多く経験し、上述の「Tomorrow」をベースに繰り広げられたNbS活動に親しみ、また他のゼミ生たちと共に宇都宮市大学生まちづくり提案(優秀賞受賞)にも臨んだ井上菜摘さんは、「市街地の緑化の衰退と発展」について深堀していきました。

卒業研究進行において大切にしている第3点目は、相互尊重・相互互惠の精神です。今年は、博士課程後期2名、修士2名、学部生19名、研究生1名と全体にゼミの人数が多く、また指導教官の私が多忙を極めていたこともあり、お一人にかけられる時間は限られたものでありました。その分、ゼミ生同士の助け合いは、目をみはるものがありました。過去の卒業研究や先行研究をもとに、自ら編み出した言説分析の手法を、他のゼミ生にもリードし、毎回の授業で実に多くの助言を友人たちに繰り広げてくれたのは、自らの研究手法も惜しみなく学友と共有してくれたのは田所さんでした(隠れたTeaching Assistantと言えましょう!)田所さんと共に、ゼミをリードしてくれた高橋この葉さんでした。お二人を中心に、全員がそれぞれに助け合いながら、7名が見事に書き上げ、またこの報告書をまとめてくれました。

本報告書には、7本の卒業研究の概要、本文、そして副差の先生方からの講評と、発表会におけるコメントーターのコメント、執筆者たちによる今後論文を執筆する皆さんへのメッセージ、過去論文一覧、編集後記が含まれています。お褒めの言葉もあれば、中には辛口のコメントもありますが、あえてそのまま、掲載しました。それも含めて、プロジェクトの記録とさせていただきます。

こうして卒業研究を改めて眺めてみますと、多様なテーマではありますが、根底にある問題関心は、共通していることがわかります。すなわち、当事者や市民、被害者や弱者を含め、多様な声を尊重しようとする民主主義的価値観です。そうした価値観が政治レベルで組み込まれていないとき、問題解決が遅れたり、別の問題が引き起こされたり、人権軽視が助長される事態がおきがちであることは、歴史が証明しています。その一方、誰かを犠牲としないwin-win方策はあるのだというメッセージは、ほぼ全員の中で明らかにされています。

「当事者」「市民」あるいは「住民」の思いを汲み取り、パートナーシップを展開することは、環境問題と社会問題の同時解決や持続可能性の実現につながるという事例が、多くの論文では紹介されています。社会的包摂性のもとでの分権的、民主主義的指向こそが、持続可能で幸福な社会の実現につながるというような歴史的法則が見出されるでしょう。本論文集を仕上げる現段階で、世界ではロシアのウクライナ侵攻が続き、イスラエル軍攻撃によるパレスチナの惨状が始まりました。いつ何がきっかけで、平穏な暮らしが奪われるかわからないこの世の中、自然が、国家が、強大な暴力装置が我々に牙をむいた時、それに対峙できる可能性は、多様な価値や尊厳への尊重と、コンパッションを伴う、市民の連帯にあり、それこそが、持続可能な社会への移行への鍵であることを、確信しています。このような価値観を体得したゼミ生たちが、今後社会に羽ばたき活躍していくことが、心から楽しみであり喜びです。

本報告書は、最後に、本報告書の作成に際し、また個々の学生の卒業研究の執筆や評価に際し、またゼミの運営全般に際し、お世話になった全ての方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

2024年3月

宇都宮大学国際学部教授 高橋若菜